東晉兵士

特別
チ12
3656
27

412
3656
27

早稲田大学

早川

うやうゐは老い京國うゝ武者
ゆてしゝ甘まこは狂い新るよ乃ほ星
のなるこ志船るこ我一見仕てゝ又
てゆ小清あへ金ゝりやと赤ゝ
ニ廿イし　　
松をきゝへうゝ橋末よ数ゝ乃て
ニゝゝ　　
花よ新あゝ風う船　夫海也乃
ニゝゝ　　
いさゝ多電光船霧も船たゝん

二、、二二、一一一一一一二二一一二一一八九二、
数く人君かゝめの世おゐて穢芭蕉
二二二一下一、二二、一一一一一一
泡沫まさに家しりかうわかる
一二、貞上音、一一一一一
まお中うなめくゐはうけも
一三一三一三二一一下一、一
小車乃ぐる葛をきたうふ志る
三、六九一二一一下一二、一一一二
川乃心ふうけて橋柱たち井隠
一、こ二二 早詞
なきさ心かぐく 是い風召さる
東坡居士まても座人かゝ日い

三重
いりやうな除ゆ乃りんへさきう
ことあきらしきめ言おゆとゝ
ほれい篤実い皆同お乃讃東
上音九二二二一下一、一二
なお様い様い露花いくれ大井箟
二二、二一一、一、一一 早詞
西面の草を乳しきやお あう
西面乃葛やふ掛ほ橋いめり成
人のうけ縁ひかる橋まそりう

上哥

こゝは先師自然居士乃法界無
縁の功力を以て渡志給ひし
橋なれハ今又か様にしくもる

ワキ上カル

なれハ抑も東岸西岸居士乃浪

詞

里ハ何くの旅人の父母哉

上哥

離志ゝ出家そや　むすびし縁
乎哉同行ふや率ひわ来る所も

なけれハ出家といふへ葉の謂も
なし出家にあらハいかにも
そうす衣を墨に染もせてたゞ

ワキ上カル

髪乃法りうらりへて善を

シテ上カル

かゝるとも　筆をもの悪を捨ても

ワキ

通なられ　折に中違　ことふ

シテ

渡ゑて向川に　かゝまる橋ハ

上の句

東屋西屋の梅の
枝に
世間枝小枝に
元こと
梅の花ひらけ
法の一すぢ
波うつ
梅なる
梅ひらめ
ハ法の花よ
いうたまハや
早付
いろも
うつてはや
早付
をうつ
実に
自性言語道断

上句

もものハなるまい
人の心に花の色
上句
いろやうつりて
法の
法の
花なる
をかぐ
うの花よ
列うん
面白や
こ
もも
梅
あうひ
たうふまつ
ふとうや
をうふ

猶ゆくあらえ成所乃佛法は
至もむき身て誑生死をすくふ
ことに妙なる誓とうや但正修
院られて末法に生成うけたわ
うるゆへにあらわ秋来まとも
逢ふうことは出離の為　花を
惜み月成てしも起さやすきに

霊鷲也　靈鷲の山にはいりと
なく鷲峰乃雲あきらずして佛
ねのひかりうさく生死乃
海には鯨八ヶ無明の浪あらく
じて未ぬ乃月やとられ生を
変るに任せて昔よりかくひ成
愛達生死にまよひまよひ法て

冥よりは暗きにおもむく六道に
ちきりにはまよはぬ所もなく
生死の苑にはあらぬ栖もなし
重苑の将変なれは哀とやいりん
又うき涙とやせんこ飛らあわと
いたんと涙まい雲と共に煙と
諸てはこれあと残としむへくも

あしなしといへともすまゐみ
白雲乃あすらとくまつて膓を
たち魂をうこそれとりふす
あしは紫葉のちまわれ詠みは
讃佳を麺数の焔まことうきとも
花蓮大紅蓮乃氷なれ流ぬ身
とられすあし驚飛乃被けて下さ

服をは表也孔濃ようはかせ
ここここ
焦熱大焦熱乃鞨をさはゐ
志めす事なしかゆゑあき
月
月をもちて　教主釈迦牟尼仏
月ふをいてたゝゆ龍なわ妄語
下
綺語悪口両舌口もてたゝゆ
龍なわ貪欲瞋恚愚癡又心よ

早詞
とゝ、もの事ふ鞨鼓をうはて
内三勢ゝ　面白や松ゝ風
朝ゝとして浪ゝふ龍くゝわ
白川乃　波乃鼓や風のさゝら

うち清まりや橋乃上　男女の
ゆきて　光明上乃　うて成
清くしてたまきぬ乃きひく
流さうきなさこれさ　ゝらいち
すみまて面子香　もちとわ
さへ清るはるハ　ものとて
あらたまの我うみわ遊く

清まハ白川　白川乃橋を
流て向ハ　京君　志賀さハ
面君　さくなさい　さくら
清波ハ　敷　いたきまく
雅楽乃歌謡の菩薩乃清波とは
きくハ　ひ人よく
あらら面白や　あふ南無三宝

実太鼓も羯鼓も笛ひちりき絃
楽世よ極楽の菩薩あるひと
ゆるれば　なすとたゝ　何と
たゝ雪や氷とへゐらん万法
こゝ一めなく実れ所と
いふよく